

## 吉田満『戦艦大和ノ最期』の執筆過程： 新資料「巨艦送葬譜」の検討を踏まえて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 貝塚, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2017">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2017</a>

# 吉田満『戦艦大和ノ最期』の執筆過程

—新資料「巨艦送葬譜」の検討を踏まえて—

貝塚 茂樹

## 1. はじめに

本稿は、吉田満の『戦艦大和ノ最期』の執筆過程を検討することを目的とするものである。『戦艦大和ノ最期』の執筆過程については、すでに千早耿一郎『大和の最期、それから—吉田満 戦後の航跡』（講談社、2004年）が詳細に検討しており、その後、『戦艦大和ノ最期』に言及した、加藤典洋『戦後の思考』（講談社、1999年）、渡辺浩平『戦艦大和—学徒兵の五十六年』（白水社、2018年）などの著作も千早の整理に依拠している。

2022（令和4）年3月、神奈川近代文学館所蔵の「吉田健一文庫」から「巨艦送葬譜」と題する新資料が発見された。題名は違うが、その内容は「戦艦大和ノ最期」の原稿であり、『戦艦大和ノ最期』の執筆過程の詳細を辿るために重要なものと言える。本稿は、千早の整理に基づく『戦艦大和ノ最期』の執筆過程を踏まえながら、更に新資料「巨艦送葬譜」の位置を検討することで、改めて『戦艦大和ノ最期』の執筆過程の全体像を明らかにすることを課題とするものである。

なお、本稿は2023（令和5）年刊行予定の『吉田満』（ミネルヴァ書房）の一部であり、叙述の形式は一般の研究論文とは異なることをお断りしたい。また、本稿での註記は最小限にとどめ、必要に応じて文中に書名・論文名を明記し、引用・参考文献を文末に付した。

## 2. 『戦艦大和ノ最期』の執筆

### 2.1. 吉川英治との出会い

東京の恵比寿にあった吉田の実家は、1944（昭和19）年5月の空襲で焼失した。その前の2月、吉田一家は、空襲を避けるため東京西多摩郡吉野村柚木（現在の東京都青梅市柚木町）に疎開していた。国鉄（現在のJR）青梅線青梅駅から奥多摩方面に四つ目の二俣尾駅が最寄り駅であった。父の茂は、25年間勤めた商事会社から1938（昭和13）年に友人二人と独立し、東京都新橋の愛宕警察署前に内外電業という会社を設立して社長を務めていた。通常は会社で寝泊まりをし、時々、西多摩の疎開先に帰る生活であった。

吉田の作成した年譜では、吉田が疎開先へ帰宅したのは1945（昭和20）年10月頃である。敗戦後、吉田には、「何もかも空虚だというような焦燥」が続いていた。吉田の様子を心配したのであろう。父の茂は、吉田を作家の吉川英治に引き合わせた。疎開先の柚木には吉川の自宅があり、父の茂は、無断で吉川家の裏口から出入りできる間柄となっていた。

吉川は、初対面の吉田の印象を「懐疑を負っている無口な面ざしが深い湖のごとき蒼さも、何もわかりませんとのみ言っていた」と伝えている。さらに吉川は、苦悩の中にいる

青年に、「怒りたいときも、啼<sup>な</sup>きたいときも、迷うときも、黙々とこしばらくは、親父さんと一しょに鎌を持って、土へ訴えているんですな。何か、答えますよ。いまの人間からは答えは出ません」と続けた。吉川はこれを「自分でもつまらない言葉」と言っているが、裏を返せば、目の前の青年はありきたりの「つまらない言葉」しかかけられない程に尋常ではない様子に見えた。

たしかに、この時の吉田の苦悩は以前よりも増していた。「何もかも空虚だというような焦燥」で自分を見失いかけていたのに加えて、復員後に戦争の話をする機会が増えたことで更に心苦しさを感じていた。話せば話すほど、「死んでゆく兵隊の心と、喋る私の心と、聞く人の心と、この三つのものがますます喰い違ってゆくような気がした」と吉田は述べている。「戦闘の実相が感心されればされるほど、きく人の嘆声が妙にそらぞらしく響き、自分はいたい何のためにこんなことを喋るのかと、いぶかしく思えてならなかった」とも述べている。

そうした中で吉川との出会いは、吉田にとってはそれまでとは全く違う経験であり、そのためであろう吉田の記憶はより具体的で詳細であった。「大家らしい臭みの少しもない氏から、穏やかな人生談義を何ううち、引き出されるままに戦場での話をはじめた」という吉田は、会話の内容を次のように振り返っている（「占領下の大和」）。

吉川氏のような聴き手を私は知らない。氏は端坐して身じろぎもせず、相槌<sup>あいづち</sup>も打たず耳を傾けていた。やがて私をみつめる眸<sup>ひとみ</sup>の中に、涙が湧いてきた。それでも氏の視線は、じっと私に注がれていた。私はいつのまにか、話しはじめた頃の心苦しさを拭われて、妙に吃<sup>ども</sup>りながら一心に話し続けた。少なくとも、戦争の経験が真実<sup>まこと</sup>どういものであるかを、おぼろげながら伝え得たように思えた。気がついてみると、私は一時間四十分ものあいだ氏と対坐していた。

帰り際、吉川は吉田に、「君はその体験を必ず書き誌<sup>しよ</sup>さなければならない。どんな形でもいい。それはまず自分自身に対する義務であり、また同胞に対する義務でもある。それは日本の記録ではなく、世界の記録として残るであろう」という趣旨のことを静かに言った。この言葉は、吉田に強烈な意味を与えた。吉川の自宅を後にした吉田は、帰宅するとすぐに筆をとって、ほぼ一日で草稿を書き上げた。これが、『戦艦大和ノ最期』の初稿である。

## 2.2. 『戦艦大和ノ最期』の初稿執筆

大学ノートに鉛筆で書かれた『戦艦大和ノ最期』の初稿は、400字詰め原稿用紙に換算して約38枚となるが、一日で書く分量としては極めて多い。「文字が逆<sup>ほとぼし</sup>るように流れ出た」と吉田は書いているが、一字一字を綴<sup>つ</sup>っていくのがもどかしいほど、まるで「ものに憑<sup>つ</sup>かれたごとく」筆を走らせた。「第一行目から、自然に文語調を形作って、すでに頭の中に組み立てられていたかのように、滑<sup>なめ</sup>らかに筆が進んだ」というが、後になって読み返してみると、どうしてこういう表現になったかと自ら不審に思える箇所が少なからずあったと述べている。自分で書いたというより、何ものかに「書かされた」という思いが吉田の中にあったに違いない。

もっとも、吉田は一气呵成に筆を進めることができた背景も冷静に分析していた。まずそれは、戦艦大和での戦闘場面があまりに強烈であり、「灼きつけられるように蘇った」ことである。戦艦大和の艦橋中央部分にたまたま配置された吉田は、戦闘の一部始終をつぶさに見届けることができる立場にあった。しかも、戦闘からの生還後は、戦闘報告を作成するために、記憶を克明に再現することが求められ、その積み重ねが記憶を鮮明に再構成した。

また、この時期、「何もかも空虚だというような焦燥」から少しずつ脱し、新しく生きる道を見つけないければならないと思い始めていたという。もちろん、まだ「新生」の糸口は見い出せないが、その正体を探ろうとしていた。「新生」は、敗戦後の吉田がよく使った言葉であったが、そのためには、「赤裸々の自己を自己の中に再現してみること、単なる呪詛や否定を戦争に投げつけるのではなく、まず戦争にまつわる自分のものいっさいを、非情にあばいてみること」が必要であると考え始めていた。吉川の言葉は、それを後押しした。

吉田は「戦艦大和ノ最期」の初稿をさらに推敲、肉付けし、別の大学ノートにペン書きでまとめた。何よりこれは、吉田が「新生」の糸口を見い出すための作業であった。作品として発表するつもりはなかったが、これは友人の〇氏（氏名不詳）をはじめ複数の人によってペン書きで書き写され、親しい友人に回覧された。

### 2.3. 小林秀雄と『創元』

吉川と出会った2ヶ月後の同年12月19日、吉田は日本銀行へ入行し、外事室統計局参事室に勤務した。学徒出陣で戦艦大和に乗艦してからちょうど一年の月日が経っていた。同年12月30日付けで和田良一に宛てた手紙には、「朝六時月光に霜を踏んで家を出、夜九時半寒風の中を暖い火のもとに帰る。(中略) 仕事は地味な事務的なものだが、大急のもの故このやうに緊張してやつてゐる。生活の落ち着きを早く得て勉強を始めたい」(『吉田満著作集 下』)と認めている。後に吉田は、1977(昭和52)年に行われた島尾敏雄との対談の中で、この時の心境を次のように振り返っている(『新編 特攻体験と戦後』)。

死ぬ直前までいって、結局死ななかったということは、これは、ただもうそういう事実として受け取るほかないんだ、という結論になりました。だがしかし、われわれがああいう戦争をして、あのような敗れ方をしたという事実の中には、非常に大きな問題が含まれているはずだという気持はあったんですけども。なかなか、その時の自分の力ですぐにはどうにもならないものですから、それはちょっとわきに置いてですね、そして戦後の自分の生活をスタートしたということです。といっても、別のところでは、わきに置いた問題は絶えず意識しながらですね。死んだ仲間のことは、いつまでたっても離れられませんからね。そういう仲間たちの死と、自分には戦後というものがあることが、どういう形でつながるかということは、しょっちゅう考えながらきたということです、この三十年……。

「新生」とまでにはいかないが、吉田が日本銀行への入行によって一步を踏み出したと言うことはできる。吉川はこの頃の吉田に会っているが、その時は最初に会った時とは打って変

わって、「頬には、太陽の色ざし、語気に土の香がしていた」と述べている。

吉田は「戦艦大和ノ最期」の初稿を作品として発表するつもりはなかったが、翌1946（昭和21）年4月1日、吉田の人生と「戦艦大和ノ最期」は大きく転回していく。この日、日本銀行の吉田を小林秀雄が訪ねてきたからである。吉田には小林との面識はない。エイプリール・フールにしては懲りすぎていると思いつつ半信半疑で受付に下りて行くと、小柄で銀灰色の髪、彫りの深い面貌の小林がおり、その手には、友人のO氏が便箋に筆記した「戦艦大和ノ最期」の初稿があった。

小林は、編集責任者として準備中の季刊誌『創元』第一輯に是非これを頂きたいと、手にある初稿を撫でながら「おそろしく慇懃<sup>いんきん</sup>に」言った。思いもよらぬ申し出に吉田は、「もしその価値があるものならお任せします」と答えた。小林は、「自分の得た真実を、それを盛るにふさわしい唯一の形式に打ちこんで描くこと、これが文学だ、それ以外に文学はない、だからこの覚え書きはりっぱに文学になっている（中略）この文語体は、はからずも一種の名文になっている、何も思い惑うことはない、この方向に進んで行けばいい」という趣旨のことを繰り返し伝えた。

ところで「戦艦大和ノ最期」の初稿を文語体で書いたことに吉田が特別な意味を込めたわけではない。先に述べたように、書き出しからごく自然に文語体になったと吉田は言う。吉田が学んだ旧制の東京府立第四中学校は、漢文教育に特に力を入れていた学校であったが、ここで培われた素養が、「自然に」文語体で書き出させ、「戦艦大和ノ最期」を「文学」たらしめた。吉田も認めているように、結果として、死生の体験の重み、そして「戦い」を描写するリズムが口語体ではうまく表現できず、文語体の格調を必要としたと言える。

吉田は、小林から指摘された部分について、約一ヶ月かけて修正を加え、原稿用紙に書き写して小林に届けた。『創元』編集部での校正が済み、発売元の創元社では刊行に向けての催しが行われた。たまたま訪れた阿川弘之は、展示されていた「戦艦大和ノ最期」の校正刷りに目を留め、最初の数行を読み出したら止まらなくなり、立ちつくしたまま最後まで一気に読み通した。後に、阿川は、「戦艦大和ノ最期」のような戦闘の記録が後世に残るのは、「偶然の積みかさなり」以外に考えられないとした上で、次のように述べた（「解説」『戦艦大和』角川書店（角川文庫））。

大和の特攻作戦に参加しなかったら、吉田氏はおそらく何もものは書かなかったであろうし、戦艦大和はこの一人の大学出の予備士官を乗組員として迎え、しかも戦闘記録係として艦橋に配置するという偶然の手順を踏んで生き永らえさせなかったならば、自らの最期のありさまをこれほど克明に歴史の上に残すことはなかったであろう。この作品は個人の力ではどうにもならなかった著者の生死の、微妙な偶然の間をくぐり抜けて私たちの手に残った日本民族の一つの記念碑と呼んでいいものである。

また阿川は、当時の海軍首脳部は、「七万二千トンの大和と三千人の将兵とを犠牲」にして、「戦艦大和ノ最期」という「光る記念碑を後世に残した」と皮肉を込めて書いている。阿川の言うように、「戦艦大和ノ最期」が「偶然の積みかさなり」から生み出された「記念碑」

とはおそらく誇張された表現ではない。しかし、一方で、戦艦大和が辿った代償はあまりに重かった。そして、その重さを我が事として受け止め、その重さを正面から引き受ける人生を自ら選択したのが吉田であった。

### 3. 『戦艦大和ノ最期』への検閲と出版

#### 3.1. 「戦艦大和ノ最期」の全面削除

占領軍で検閲や諜報を担当する総本部は、G-2（参謀第Ⅱ部）であり、その責任者は、C・A・ウィロビー（Willoughby）であった。G-2（参謀第Ⅱ部）の下には民事を扱う CIS（民間諜報局）と軍事、刑事を扱う CIC（対敵諜報部）が置かれていた。CIS の下に置かれたのが CCD であった。CCD（民間検閲局）は秘密機関であり、日本での出版物は、CCD（民間検閲局）による検閲を受けていた。

新聞・出版物における検閲の基準となったのは、GHQ が 1945 年 9 月 19 日に出した「プレス・コード」であった。これは、10 項目からなる検閲規定であるが、CCD（民間検閲局）ではこの「プレス・コード」に基づき、さらに 30 項目にわたる細則を作成することで、占領軍に対して不利となる記事、不信、怨嗟を招くような記事の掲載を認めなかった。特に、細則には、「軍国主義の擁護」「軍国主義の宣伝」が規定されており、30 項目のいずれかに抵触した刊行物に対して削除または掲載（刊行）禁止の処分が行われた。なかでも、雑誌の創刊号については、目次、ゲラ（校正刷り）、発行者、発行地などの情報が精査され、CCD（民間検閲局）によって「プレス・コード」に違反していないと判断されれば、第 2 号以降は事後検閲のメディアとして認められた（山本武利『GHQ の検閲・諜報・宣伝工作』）。

『創元』第一輯は刊行間近であったが、掲載を予定されていた「戦艦大和ノ最期」は、占領軍の検閲によって全面削除となった。原稿が事前検閲の対象となることは編集部も予測しており、事前に CCD（民間検閲局）に連絡をして非公式に検閲を受け、それに基づいて数箇所を削除するなど、万全を期した上での結果であった。吉田によれば、事前に連絡をした担当者のところでは決裁されず、CCD（民間検閲局）の最高会議まで回され、ここで出版検閲係のチーフをしていた P 氏の逆鱗に触れたとされる。吉田によれば、「第一行から最終行まで赤線を引かれて完全な抹殺を受け、全ページ、紙面一杯に朱書きで、Suppress（発禁）と書きなぐってあった。さらに合わせて、今後いかなる機会を通じても、公表罷りならぬとのキツイお達しであった」（「占領下の『大和』）ということになる。

後に触れるように、「戦艦大和ノ最期」の検閲文書を発見し、これを分析したのは、江藤淳である。1979（昭和 54）年から 1980（昭和 55）年にかけて、アメリカのワシントンにあるプランゲ文庫で調査した江藤は、「戦艦大和ノ最期」に関わる検閲の様子を伝えている。「戦艦大和ノ最期」に関する検閲官の意見書は、これが「死地に身を投じたときに味わって来た盲目的緊張感の賛美である」とし、「ここにこそ内側から見た日本軍国主義の精髓がある」というものであった。

また、「これを読んだ日本人の好戦的分子が、新たな大和によりよき武運をあたえるような次の戦争を切望しないと、いったい誰が保障するだろうか？」と述べ、「かかる徹頭徹尾軍国

主義的な作品が、かりにある観点からすれば名作であるにせよ、大幅な削除のみで検閲を通過するようなことがあれば、CCDの検閲基準は革命の変革を蒙ったと思料しなければならない。掲載禁止を相当とする」と結論づけていた（江藤淳『落葉の掃き寄せ 一九四六年憲法—その拘束』）。

また、検閲官によって特にチェックが付けられた部分は少なくない。一例を挙げれば、「一兵マデモ誇ラカニ胸張ツテ甲板ニ整列ス」「雄偉ノ生氣マサニ躍動シテ奮迅」「素志ヲ達シ、特攻隊配属トナル、幸ヒナルカナ」「至烈ノ闘魂、至高ノ錬度、天下ニ恥ヂザル最期ナリ」などである。これらは、「プレス・コード」が基準とするような、占領軍に対して不利となり、不信、怨嗟を招く表現とは言えない。強いて言えば、ここに戦闘に赴く士気や不屈の信念、決意などが書かれていることは確かであるが、それは、吉田も初めから自覚していた。占領解除後の1952（昭和27）年に刊行した『戦艦大和ノ最期』（創元社）の「あとがき」に吉田は次のように書いている。

この作品に私は、戦いの中の自分の姿をそのまま描こうとした。ともかくも第一線の兵科士官であった私が、この程度の血氣に燃えていたからといって、別に不思議はない。我々にとって、戦陣の生活、出撃の體驗は、この世の限りのものだったのである。若者が、最後の人生に、何とか生甲斐を見出そうと苦しみ、そこに何ものかを肯定しようとあがくことこそ、むしろ自然ではなからうか。

吉田の指摘は当然であり、ごく自然な心情の吐露であろう。しかし、そもそも原稿が全面削除である以上、チェックが付けられたいくつかの記述の是非はあまり意味をなさない。これら一つ一つの表現が「プレス・コード」に該当するかどうかという問題ではなく、「戦艦大和ノ最期」それ自体が排除され、抹殺されようとしたという事実が重要であった。

### 3.2. 抗議文の提出

「戦艦大和ノ最期」が検閲によって全面削除されたことに対して、小林秀雄が中心となって抗議文が最高責任者のウィロビー少将に提出された。それは、「かかる形式的な検閲制度は全く民主主義に反する、却下の理由は何なのか、もし作者が軍国主義の鼓吹を意図しているというなら、作者を召喚してそれを確認するぐらいの用意があるべきではなからうか」という趣旨の文面であった。これに対する回答は、抗議の趣旨は大体において了解したが、あの決定は、「チーフの責任において、最高会議を経てなされたもので、自分が職権をもって覆すことはできない。もし強行するなら、責任者の失態を認めたこととなり、彼の罷免は必至である。悪しからず了承されたい」というもので、「暗に講話条約発効までの泣き寝入り<sup>くつがえ</sup>を強いたもの」であった（「占領下の『大和』」）。

もちろん、この回答は吉田には不本意なものであった。「事の真相は、それがあえて敗戦後の批判を捨て、戦時下の実感<sup>はばか</sup>を憚らずに展開したことにあった」と吉田はいう。そして、「今から見れば、聖戦ならぬいわゆる戦略戦争の、末路も近い惨憺たる完敗のさまは、まさに明々白白のごとくであるが、事実はそのように単純ではなかった」と述べながら、次のように続けた。

死にゆく者が、いかに絶対の特攻攻撃であっても、ただ諦めと自嘲のうちに、単に否定的消極的に斃れる<sup>たお</sup>というのは、自然に反する。そこには何かがある。少なくとも生命の最後の燃焼があり、生き残った日本人を刺戟する昂り<sup>たかぶ</sup>がある。死者の肚の底の声がある。それは、戦争肯定とか愛国というものをはるかに超えてはいるが、異様に悲痛な叫びを持っている。おそらく占領行政には、とんだ厄介物だったのだろう。

### 3.3. 白洲次郎の抗議

『創元』第一輯に掲載予定であった「戦艦大和ノ最期」の全文削除について占領軍 G-2 (参謀第Ⅱ部) のウィロビーに接触し、抗議したのは、白洲次郎(終戦連絡部中央事務局次長)である。そして白洲次郎に仲介を依頼したのは、小林秀雄であった。小林は、作家の河上徹太郎を通じて白洲の夫人(白洲正子)を紹介され、白洲から占領軍への働きかけを頼んだ(白洲正子『鶴川日記』)。ただし、この件については、吉田健一を通じて父吉田茂から白洲への指示があったとの記述もある(「黒字のネクタイ」)。どちらが正しいというわけではなく、おそらく双方からの働きかけの接点に白洲がいたと理解した方がよいであろう。白洲の人間関係や当時の立場からすれば、むしろそれは自然なことであった。

当時、このことを吉田は知らなかったが、白洲が占領軍 G-2 (参謀第Ⅱ部) のウィロビーに強力に働きかけた様子は、やはり江藤が発掘した検閲関係文書の中に残っている。それは概ね次のような報告である(『落葉の掃き寄せ 一九四六年憲法—その拘束』)。

- 一. 『戦艦大和ノ最期』が掲載禁止処分に付せられたのち、白洲次郎氏がウィロビー少将に対して、作品には反対の余地がなく、かかる傑作を掲載禁止にした検閲官は文学のわからぬ馬鹿共だという虚偽の情報を提供した。
- 二. ウィロビー少将は書面を参謀第二部民間課報局民間検閲支隊に送って調査を命じ、これに対して作品中の不適當かつ軍国主義的部分を一切添付した回答が少将に提出された。以後本件について再度下問がなかったことからして、本件はこれで落ち着いたものと思われる。(以下、略)
- 三. ウィロビー少将が白洲氏に対して、作品の掲載禁止を取り消すことはできないと述べたとき、どんな言葉を使ったかは小官の関知するところではないが、少将が小官のとった措置を正当と考えていたことはまず確実である。

この報告書を作成したのは J・J・C と署名された検閲官である。これを見る限り、白洲の抗議はウィロビーに受け入れられることはなく、効を奏さなかったことがわかる。また、注意しなければならないのは、この報告書が作成された 1948 (昭和 23) 年 10 月 25 日という日付である。この時、なぜこの報告が書かれる必要があったのか。それを探るために、「戦艦大和ノ最期」のその後を辿ってみたい。

### 3.4. 口語版『戦艦大和ノ最期』の発表

「戦艦大和ノ最期」は、占領解除後の1952（昭和27）年8月に創元社より出版された。1945年10月頃に吉川英治に勧められて大学ノートに書いた初稿から約七年の時間が経過していた。その後、吉田は、1974（昭和49）年、「初版における記憶の過りや若干の字句、記録の引用に修正をほどこした「決定稿保存版」を刊行する。この間の「戦艦大和ノ最期」原稿を8種類に分け、それぞれの節ごとの分量の増減と、加筆・削除部分を丁寧に分析したのが、千早耿一郎（伊藤健一）である。千早は、日本銀行で後に国庫局長となった吉田を補佐する一方、日本銀行の同人誌『行友』で吉田の同人でもあった。

千早が整理した8種類の原稿は、概ね以下のものである。

- ①（文語）吉川英治に勧められ、ほとんど一日で書かれたもの。省略符号多し。
- ②（文語）「戦艦大和ノ最期」。①の文章に肉付けしたもの。2～3つの写本がある。
- ③（文語）「戦艦大和ノ最期」。小林秀雄に勧められ、②に若干の手直しを加えたもので、『創元』第一輯に掲載されるはずであったが、CCD（民間検閲局）による検閲で全文削除となる。「初出テキスト」と言われるものである。
- ④（口語）「戦艦大和」。『新潮』1947年10月号に掲載される。筆名は、細川宗吉。
- ⑤（口語）「小説軍艦大和」。『サロン』1949年6月号に掲載される。④に加筆したもの。
- ⑥（口語）『軍艦大和』。（銀座出版社、1949年8月刊行。⑤に若干の手直しを加えたものの。
- ⑦（文語）『戦艦大和ノ最期』。（創元社、1952年8月）。
- ⑧（文語）『戦艦大和ノ最期』。（北洋社、1974年8月）。同年10月に「決定稿保存版」を刊行（北洋社）。

千早の整理した8種類の原稿のうち、①から③の経緯についてはすでに述べた。その後、吉田は、④の口語版の「戦艦大和」を『新潮』1947（昭和22）年10月号に掲載した。④については、出版社の意向で本名での掲載は止め、「細川宗吉」の筆名で発表した。これは、1944（昭和19）年7月29日に中国戦線で戦病死した姉・瑠璃子の夫で義兄の細川宗平の名前に因んだものである。しかし、この原稿は省略された部分が多く、原稿用紙に換算して約34枚のものであり、③と比較すると約3分の1程度の分量であった。

吉田は、④についてほとんど言及してはいない。吉田にとってその内容が本意であったことはいうまでもないが、むしろそれは織り込み済みであり、おそらくそこには別の意味があったに違いない。それは、④によって、検閲の状況を見極め、うまく掲載されれば、次の手をつたための、いわば「アドバルーン」として捉えていたように思える。事実、吉田は、同じ口語体ではあるが、⑤「小説軍艦大和」の掲載に向けて準備を始めているからである。

その後、「戦艦大和ノ最期」の発表を実現しようとする動きは、1948年10月にも行われた。その際、中心的な役割を果たしたのが、吉田健一である。吉田健一は、父で首相の吉田茂の長男である。吉田と吉田健一とは全く面識はなかったが、「戦艦大和ノ最期」の全文削除

の際に、「自発的に応援の役を買って出られた方のなかの最も熱心な一人」であった。検閲という非民主的な蛮行に挑戦する以外に特に意図はない、と吉田健一は説明したが、その活動は、「強力かつ広範囲で、司令部の高官に直接抗議したり、ドイツ人の神父に仲介を依頼されたりした」（「黒字のネクタイ」）と吉田は感謝している。

吉田健一の CCD（民間検閲局）への働きかけの概要は、やはり江藤が発掘した検閲関係文書に明らかであり、そのいきさつは吉田の記憶とも一致する。同年 10 月 18 日の記録には、吉田健一が CCD（民間検閲局）を訪れ、「戦艦大和ノ最期」の検閲処分の再考を求めたことが記されている。吉田の直接的な行動の背景には、小林の意向があった。小林は、同年 11 月の発行予定で『創元』第二輯の編集を行っており、第二輯に「戦艦大和ノ最期」の掲載を実現しなかったからである。

この時期、CCD（民間検閲局）の検閲は事前検閲から事後検閲に移行していたが、吉田健一は、③の検閲から 2 年も経過しているので、何とかこの作品を公刊したいと願い出た。その際、上智大学のロゲンドルフ神父が「戦艦大和ノ最期」の公刊を望んでいることや、これを出版したいと思っている出版社が数多くあることなどを伝えた。しかし、CCD（民間検閲局）の対応は極めて冷淡であった。検閲関係文書には、CCD（民間検閲局）が、「戦艦大和ノ最期」を「その性質上、徹頭徹尾軍事的なものである」と断定し、検閲はすでに事後検閲であり、「出版物に対する責任は出版名義人にあると申し渡しておいた」と伝えている。しかもここでは、「吉田（健）氏がこの作品に関心を蘇らせたのが、父親が首相に再任されて僅か三日後のことであったという事実は注目に値する」と皮肉を込めた報告をしていた（同年 10 月 15 日に第二次吉田内閣が成立していた）。

吉田健一は CCD（民間検閲局）の回答に満足せず、何とか「戦艦大和ノ最期」の掲載には反対すべき理由がないという言葉を取ろうとしたが、CCD（民間検閲局）は、「プレスコード」に違反しなければ出版できると繰り返すだけでそれ以上の回答はしていない（『落葉の掃き寄せ 一九四六年憲法—その拘束』）。

事前検閲に比べて、事後検閲の方が規制が緩和されているように見えるが、事後検閲は、出版の最後段階では発行が禁止される可能性が残されており、両者には実質的な違いはない。むしろ、事後検閲では全ての編集が済んだ後に発行が禁止される場合もあり、出版社や編集者がリスクを背負い込む可能性があることから、出版に消極的となる場合も少なくなかった。吉田健一が、CCD（民間検閲局）から掲載には反対すべき理由がないという言葉を取ろうとしたのは、こうした状況があったためである。

### 3.5. CCD からの出頭命令

『新潮』へ掲載された④については、特に大きな波紋はなかった。そこで吉田は、次の行動をとった。CCD（民間検閲局）からの拒否が、かえって何とかしてこれを世に出したいという気持ちを刺激した、と吉田は述べている。発禁の可能性が高い原稿を出してくれる出版社がない中で、吉田は「潰れてもかまわんというような雑誌」にまず載せてみる可能性を探った。これに呼応したのが、銀座出版社から発行されていた『サロン』という雑誌であった。『サロン』は、事後検閲の対象となっていた大衆娯楽雑誌で、肉体文学系作家の媒体でもあっ

た。発行部数は約8万部。週刊誌と同じ判型の雑誌であった。

掲載にあたって吉田は、文語体の「戦艦大和ノ最期」では検閲を通るはずはないが、全く形を崩したものでは意味がないと考え、口語体の小説とした上で、表現を柔らかくして題名も変えることとした。これが、「小説軍艦大和」として1949（昭和24）年6月号の『サロン』に掲載された⑤の原稿である。同じ口語体でも④の原稿に比べれば、⑤は分量も約3倍近くに増加しており、向井潤吉による10枚の挿絵が挿入されていた。また、ここには吉川英治、小林秀雄、林房雄、梅崎春生の推薦文が付されていた。これら推薦文は、当初、『創元』第一輯の際に併せて掲載される予定のものであった。『サロン』への掲載には、吉田の次のような思惑もあった（「占領下の大和」）。

こういう三流雑誌なら、あるいは見逃される見込みもありはしまいか。もしそのまま無事にある期間を過ぎれば、今度は単行本に原形を文語体で組むという手がある。単行本が<sup>とが</sup>咎められたら、雑誌掲載のものただ文体を異にするだけで、実質的には同一のものであるから、一方が通り一方が却下されるのは辻褄<sup>つじつま</sup>が合わぬと逆襲すれば、当局は発禁断行の機を失するということになりはしまいか。

この思惑は、最初は成功したかに見えた。発刊から1ヶ月程は何事もなく過ぎたからである。そのため、吉田の思惑通り、銀座出版社から単行本刊行の準備も着々と進め、同書には文語体の原稿も併せて収録する予定であった。ところが、同年7月10日前後の刊行を予定していた直前の7月1日、CCD（民間検閲局）の新聞・映画・放送部長から検閲官宛てに指令が発せられた。その内容は、概ね次のようなものであった（『落葉の掃き寄せ 一九四六年憲法—その拘束』）。

- ① 吉田は、禁止された作品を発行人に手渡し、CCDが繰り返して当該作品を禁止されておりきわめて不相当である旨を警告したにもかかわらず、その出版を企てたかどによって嚴重に譴責されるべきこと。（中略）今後禁止された作品をひそかに出版しようとするれば、同人のみならず同人が共犯関係に誘い込んだ発行人に対しても、不都合が起こりかねない旨を申し渡すこと。
- ② 発行人は、禁止された作品の出版を企画し、超国家主義的宣伝をおこない、プレスコード違反をおかしたかどによって嚴重に譴責されるべきこと。（中略）発行人は当該書籍に関する同人の意図を、今後緊密にCCDに連絡すること。いかなる状況の下においても、禁止された文語体作品の出版は許可されない。

これを受けて単行本は出版の差し止めが言い渡された。しかも、同年7月5日には、吉田は銀座出版社の編集長とともにCCD（民間検閲局）出版課に出頭を命じられた。この年の5月、吉田は中井嘉子と結婚していたが、この日の朝、「今夜は帰れないかも知れない」と嘉子に言い残し家を出ている。

吉田が予想した通り、CCD（民間検閲局）の対応は厳しいものであった。「初めから罪人

扱いで、プレスコード（出版法）違反、あるいは占領政策敵対行為の証拠調べである。一度検閲却下を受けた作品を再び出版しようというのは、明らかに意識的な反抗だときめつけてくる」と吉田は述べている。CCD（民間検閲局）の指摘は、③の原稿のゲラ刷りと今回のゲラ刷りをそれぞれ全訳対照して、「若干筆は入れてあるが、客観的にあくまで同一のものだと結論する。しまいには沖縄行きをほのめかす。ある事実を喋ると、それをどこで聞いたかと追及してくる。某々から聞いたと答えると、即座にそこに長距離電話をかけて確かめる」というものであった（「占領下の大和」）。

検閲関係文書によれば、これに対して、吉田は、ごく最近にいたるまで、1946年に創元社に渡した作品が CCD の意向に反するものであることも、また吉田健一が作品掲載のために奔走したことも知らなかったと答えたとされる。後者に関しては必ずしも間違いではないが、文書の欄外には、「よくもぬけぬけとそんなことがいえたものだ」という CCD（民間検閲局）担当官のメモがあったと江藤は記述している（『落葉の掃き寄せ 一九四六年憲法—その拘束』）。

### 3.6. 単行本の刊行

CCD（民間検閲局）の追及は、吉田に「もう絶対に出さないから、それならいいでしょう、と投げ出したくなった」と思わせるほど厳しく執拗なものであった。しかし、ある外国人が間に入ってくれるようになると状況は好転し、交渉も対等に近くなり、「プレス・コード」のどの条項に該当することが、却下の正確な理由なのかの説明を求めることもできるようになった。「占領政策に反する目的をもった出版だ」と指摘されると、「それが具体的には、作品のどの字句を指すのか、と追及する。更に、プレスコードはポツダム勅令の第何条にもとづくものかと突っ込んでゆく」という具合である。

ポツダム宣言には、「出版の自由」が規定されていたこともあり、ついには「チーフ以下、部員が口をつぐんで顔を見合わせる場面もあり、最後は急転して、雑誌掲載分を十数箇所削除し、しかも削除箇所は、読者に絶対分からぬように配慮する」という条件で単行本への再録が許可された。ただし、文語体の原稿は、占領政策の継続中は発表しないことがきつク言い渡された。文語体は、軍隊の命令用語であり、歩兵操典のスタイルであるというのがその理由であった。

CCD（民間検閲局）が譲歩した理由として、チーフ S 氏との仲介を図ってくれたドイツ人の R 氏の存在も大きかった。単行本の刊行を認めたくないチーフ S 氏に対して、「もし君が、心をこめて書いた、しかも最初の書物が、自分にも納得できない、何かわけの分からぬ理由で葬り去られ、しかも身に憶えない犯罪者のレッテルを貼られるとしたら、そのことが君の将来に、どんな影響を与えると思うか。それほど重要な決定をするのだということを、よく考えてみたまえ」と言い諭した。この時、若い三十前後のチーフ S 氏は、澄んだ明るい眸を上げて、吉田と R 氏を交互に見つめて、「自分を説き伏せるように、何度もうなずいた」と吉田は述べている。

一方で、「戦艦大和ノ最期」をめぐる検閲が難航した一つの要因は、発禁をすすめる多数の投書や密告があったと吉田は見ていた。「出版関係の商売がたきの妨害か、政治的な意図か、

どういう筋のものかは知らぬが、当局はこれを相当重視していた形跡がある」と述べている。これについても、R氏は、「そういう投書をして、首尾よく没書にさせて、喜ぶ連中はどういう種類の人間か。日本にとって、また、日本を占領するアメリカにとって、本当にプラスになる人間かどうか、よく考えてみたことがあるか」とチーフS氏に詰め寄ったことを吉田は覚えている（「占領下の大和」）。

こうした経緯を経て、1949年8月、単行本の『軍艦大和』が銀座出版社から刊行された。これが⑥に該当するもので、『サロン』に掲載された⑤の原稿を手直したものである。ただし、当初予定していた文語版の原稿は掲載されず、小林秀雄らの推薦文も掲載されなかったが、巻頭には、在りし日の戦艦大和と攻撃を受け撃沈する際の大和の2枚の写真が掲載された。「はじめに」や「おわりに」などはなく、「終りなき貫徹」「真実の書」「新生」の3つの論稿が加えられた。なかでも、「新生」は、後に「死・愛・信仰」と改称されたもので、吉田の人生にとっては重要な意味を持つものであった。

### 3.7. 文語版『戦艦大和ノ最期』の刊行

吉田は、銀座出版社から出版された『軍艦大和』について、戦艦大和の終焉を伝える手記が、「紆余曲折を経てようやく陽の目をみた」と述べている。本来の形ではないにしても、同書が公刊されたことで大きく前進したことは確かではあるが、吉田にとっては不本意なものであったことはいうまでもない。吉田が一応満足する形となるのは、1952年4月28日、サンフランシスコ講和条約が発効し、連合国軍による日本占領が終結した直後の同年8月、創元社から刊行された文語版の『戦艦大和ノ最期』によってである。これが、千早の整理した8種類の原稿のうちの⑦である。

では、なぜ吉田はCCD（民間検閲局）による検閲と戦い、しかも不本意な形での刊行に耐えながら、これ程までに刊行に拘ったのであろうか。もともと、吉田には「戦艦大和ノ最期」を発表する意思もなく、また文筆で身を立てるつもりもなかったことはすでに述べた通りである。日本銀行では外事局で日本の金融政策の実情を英訳する仕事に従事しており、将来を嘱望される若手行員として、銀行内の評価は固まりつつあった。しかも、単行本の公刊をめぐってCCD（民間検閲局）と対峙した時には、吉田はちょうど結婚をした直後であり、公私ともに充実しつつある時期でもあった。

それでも吉田が、「戦艦大和ノ最期」の発表に拘ったのは、一つには、この原稿の公表に尽力してくれた人々に対する責任と感謝の思いがあったことは容易に想像できる。小林秀雄や吉田健一について言及する文章を残しているのはその表れと言える。

また、多くの論者が指摘するように、吉田がこの書を、戦闘によって死を余儀なくされた者たちへの「鎮魂の紙碑」「鎮魂の賦」となることをひたすら願っていたことも間違いない。江藤が指摘するように、それは、吉田自身の「再生のためにも必要な祭儀」でもあった。人間は人生を分断され、過去を奪われたまま生き続けることはできない。そして、吉田にとってその過去は、水底に眠る戦艦大和の三千の戦友たちの面影と分かち難く結びついていた。とすれば、「深い哀惜の念」をもって「その面影を作品のなかに定着し、そのことによって過去とのきずなを再確認すること。それをにおいて吉田氏には再生の道はなかった」（『落葉の掃

き寄せ 一九四六年憲法—その拘束』)。江藤はこう述べている。

実はそのことは、⑦の「あとがき」で吉田自身も言及している。吉田は、「敗戦によって覚醒した筈の我々は、十分自己批判しなければならないが、それ程忽ちに我々は賢くなつたのであろうか。我々が戦ったということはどういうことだつたのか、我々が敗れたというのはどういうことだつたのか、を真実の深さまで悟り得ているか」と問い、次のように続けた。

少なくとも私は、そうではない。私は考える。まず、自分が自分に与えられた立場で戦争に協力したということが、どのような意味を持っていたのかを、明らかにしなければならない。私の協力のすべてが否定されるのか、またどの部分が容認され、どの部分が否定されるのか、をつき止めてみなければならない。そうでなくて、日本人としての新生のいとぐちを、どこに見出し得よう——先ず率直な自己展開を自らに課した所以である。

「過去とのきずなを再確認」することが、吉田の「新生」にとって切実に重要であったことはこの言葉で尽きている。しかし、それは占領下の時期に、CCD（民間検閲局）の検閲と対峙し、不本意な形で公表を受け入れてまでも刊行にこだわった理由としては弱い。「鎮魂」「新生」は、あくまでも吉田個人の問題として解決されてもよいからである。そう考えると、吉田にとって刊行に固執する意味は、同じ「あとがき」の前段にあることがわかる。

それは、『新潮』の④の原稿や、『サロン』の⑤の原稿に対して行われた「戦争肯定の文学」「軍国精神鼓吹の小説」との批判に対してであった。もちろんここには、CCD（民間検閲局）による検閲が含まれることは言うまでもないが、吉田は、「戦争を一途に嫌悪し、心の中にこれを否定しつくそうとする者と、戦争に反発しつゝも、生涯の最後の体験である戦闘の中に、些かなりとも意義を見出して死のうと心を砕く者と、この両者に、その苦しみの純度において、悲惨さにおいて根本的な違いがあるであろうか」と疑問を投げかける。そして、後者が戦争肯定と非難されるとすれば、「我々はどのように振舞うべきであったのかを、教えていただきたい」と続ける。そして、「我々は、一人残らず召集を忌避して死刑に処せられるべきであったのか。或いは、極めて怠惰な、無為な兵士となり、自己の責任を放擲すべきだったのか」と述べながら、再び続ける。「戦争を否定するということは、現実には、どのような行為を意味するのかを教えていたゞきたい。単なる戦争憎悪は無力であり、むしろ当然過ぎて無意味である。誰が、この作品に描かれたような成果を、愛好し得よう」。

CCD（民間検閲局）の検閲による否定と世論からの批判。とりわけ吉田には、戦争を前後して価値観の転倒が起こった戦後日本の風潮を受け入れ、たやすく容認することはできなかった。何よりそれは、戦艦大和で共に闘い、斃れた戦友に対する侮蔑であったからである。その名誉のためにも、たとえどのような形であれ、『戦艦大和ノ最期』を刊行することで、戦後日本と対峙し、短絡的に戦争を忌避するだけの風潮と闘わなければならなかったのである。その意味で、『戦艦大和ノ最期』の刊行は、その後、56年の生涯を閉じるまで続く、戦後日本との長い闘いの序章であった。

同書には、吉川英治、小林秀雄、河上徹太郎、林房雄、三島由紀夫による「跋文」が付された。なかでも林房雄は、「一つの戦争をまともに生きぬいた者のみが次の戦争を欲しない」が、そうでない者は、終戦の翌日から再び戦争を開始すると述べ、『戦艦大和ノ最期』は、「戦ひの書」でもなければ、「死の書」でもなく、「死を通じて生に至った書だ。(中略) この慟哭を知れ。この慟哭の彼方には、再び地上の戦争はない」と述べている。当時の吉田の思いに近い言葉かもしれない。

#### 4. 『戦艦大和ノ最期』と新資料「巨艦送葬譜」

##### 4.1. 新資料「巨艦送葬譜」の発見

1974年10月、吉田は、記憶の間違いや若干の字句、記録の引用などの修正を施して「決定稿保存版」を北洋社から刊行した。千早の整理による⑧の原稿がこれにあたる。これによって、『戦艦大和ノ最期』は完成したことになる。

ところが、2022年、神奈川近代文学館所蔵の「吉田健一文庫」から吉田満執筆の「巨艦送葬譜」と題した資料が発見された。400字詰め原稿用紙に手書きで書かれたものである。73枚からなる文語体の原稿は紐綴され、「吉田健一先生 吉田満」と表紙に書かれた茶色の封筒に納められていた。原稿の表紙には、「巨艦送葬譜 吉田満作」と書かれており、原稿の最後には、「昭和二十年十月初稿 二十二年十二月改訂」と記載されている。原稿が入っていた封筒の文字は吉田の筆跡であるが、原稿はすべて吉田ではない別の人の手によるものである。表題は異なっているが、原稿の中身は「戦艦大和ノ最期」そのものである。これによって、千早の整理した8種類の原稿の他に、もう一つ新たな原稿が加わることになる。

新資料「巨艦送葬譜」について、吉田は具体的には言及しておらず、日本銀行で吉田と身近に接した千早もこの原稿の存在に全く言及していない。果たして、「巨艦送葬譜」はどのような経緯で書かれ、千早の整理した8種類の原稿とどのような関係を持つのか。まず、それを解くヒントになるのが、同資料に添えられた、吉田から吉田健一宛に送られた1949年6月9日付けの次の書簡である。

早速のお手紙ありがとうございます。こちらこそ無沙汰致しております。

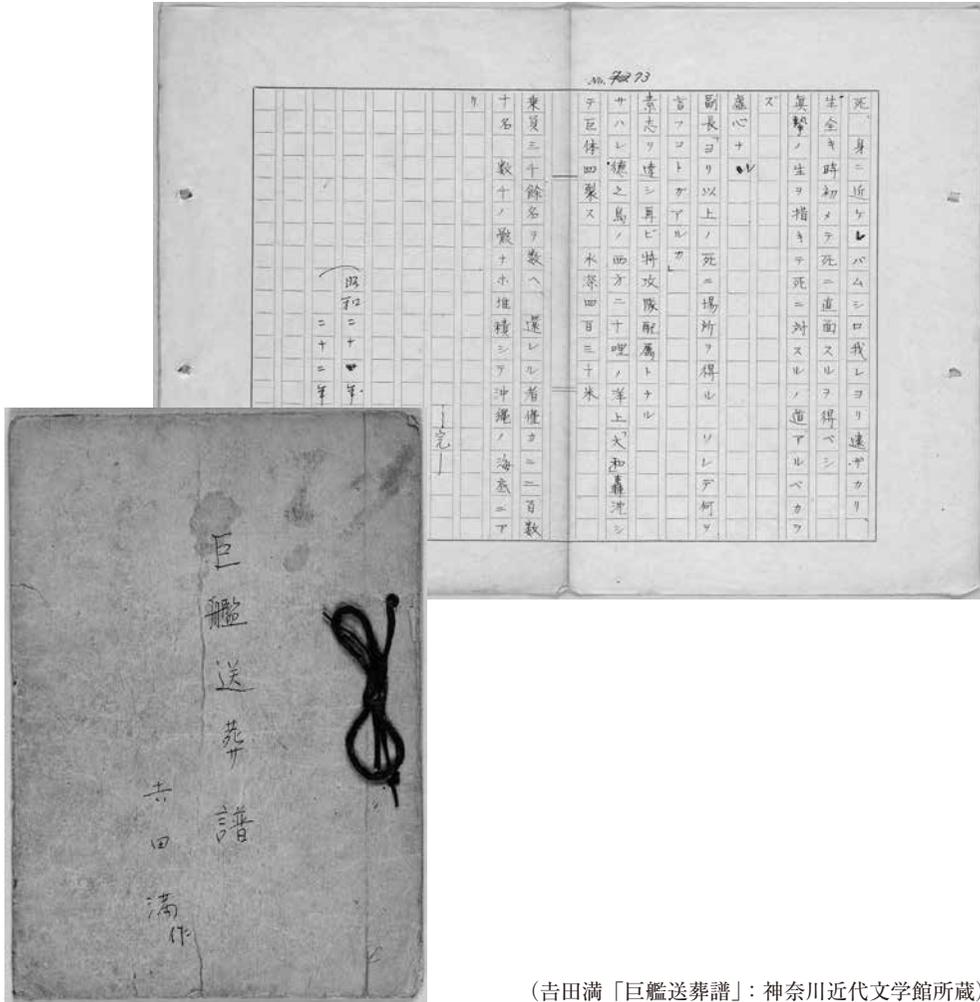
いろいろとお世話になりました。拙作がとうとう陽の目を見ることができましたのも、大兄のひとかたならぬお骨折りのお御蔭と、ただただ感謝しています。

単行本がこの中旬に出る予定で、それには文語と口語とをのせる予定でしたが、ふたたび中止せよとの指令があり、目下のところ拱手の状態です。

雑誌の方に対しては、別に譴責はなかったのですが、とに角止むを得ません。

いつかお目にかかって、あれを英訳していただくことなど、おねがいしようと思っておりましたが、そういう状態では、ちょっとそれもためらっています。

別に英文出版のはなしはその後具体的には起こっていませんが、いつかそういうはなしがあったときに、即応したいと考えていたのです。



(吉田満「巨艦送葬譜」：神奈川近代文学館所蔵)

もとよりご多忙の大兄ゆえ、そのようなお願いは常識に外れているのですが、初めからあの作品に関心を寄せられた方の手で訳稿も手がけていただきたい気持ちがつよく、したがって原稿（日本文）をおあずけしておいて、おひまの折（そのようなものはないかもしれませんが）、気が向いたら二―三行ずつでも訳して置いていただければと思ったのでした。英文が出来上がっていれば、出版のはなしも近いのではないかと存じます。

書き出し部分を見ると、吉田健一からの手紙への返信であることがわかる。時期的には、『サロン』に⑤の原稿を掲載し、銀座出版社から単行本出版の準備を進めていた時に、CCD（民間検閲局）から出版中止の連絡を受けた直後であろう。先述したように、直後の7月5日、吉田はCCD（民間検閲局）から出頭を命じられることになるが、この時期が「拱手の状態」にあったというのは、決して誇張ではない。おそらく、初めに吉田健一から出された手紙は、こうした状況を心配してのものであったかもしれない。

しかし、手紙の後半は、前半とは違い、『戦艦大和ノ最期』の英訳を吉田健一に依頼する内容となっており、むしろこちらが主眼である。「拱手の状態」にある中で、英訳での出版を具体化しようとする吉田の姿勢には「前向き」「積極的」というより、執念ともいえるべき「激しさ」を感じる。CCD（民間検閲局）による検閲との闘いをしている中で、逆に英語での出版を画策しようとする吉田の姿は、四面楚歌な状況での昂りがあったとしても、やはり戦闘的である。ただし、決して無鉄砲で投げやりなものではなく、あくまでも冷静な計画性を感じる。

なぜ、英語での出版を願ったのか。吉田は、この点にほとんど触れてはいない。吉川英治に会った際に、「世界の記録として残るであろう」と言われた言葉が念頭にあったかもしれないが、これについても十分な根拠があるわけではない。もっとも、注意深く見ていくと次のような気になる記述がある（「占領下の大和」）。

終戦後二年ほどして、イギリスの日本文学研究者 S 氏から翻訳の希望があったので、楷書で写してはるばる送ったが、まもなく不可能を理由に送り返してきた。「古事記」や「万葉集」を手がけたという同氏も、漢詩のような形式と、青年の客気に満ちた詠嘆とのこの奇妙な混合物には、<sup>へきえき</sup>辟易したのであろう。アメリカの出版社からも、その後二度ばかり話があったが、翻訳者が手を上げてしまうので、いずれも実現しなかった。

S 氏が誰かは特定できないが、この記述が正確だとすると、1947 年前後、楷書で書いた原稿をイギリスまで送ったことになる。また、時期は特定できないが、アメリカの出版社から 2 度ほど翻訳の話が持ち込まれたという。同じ趣旨の記述は、吉田健一に言及した「黒字のネクタイ」というエッセイの中にもある。「これまでに日本文学の古典を翻訳した経験のある英米の専門家から数回申し出があったが、訳し出してみると、この文語体はとても手に負えないから、次々に投げ出された経験がある」というのが、その該当部分である。前者の方が具体的であるが、一連の経緯は、先の吉田健一への手紙の中で、「別に英文出版のはなしはその後具体的には起こっていませんが」という記述とも符合する。

「黒字のネクタイ」では、吉田が吉田健一から「あの文章が訳せる男が、ここに一人だけいる。いつか時間を作って、やってあげよう」という「有難い公約をいただいた」ことが記述されている。この「公約」が、先述の手紙の前なのか後なのかはわからないが、少なくともこの手紙が、「巨艦送葬譜」と題した原稿の英訳を依頼したものであることは間違いない。

#### 4.2. 新資料「巨艦送葬譜」の位置

吉田健一に依頼した「巨艦送葬譜」の翻訳は、結局は実現しなかった。では、この「巨艦送葬譜」は、これまで述べてきた一連の『戦艦大和ノ最期』の成立過程の中のどこに位置付くのか。これが、イギリスの日本文学研究者の S 氏に送ったものである可能性も含めて検討していきたい。

「巨艦送葬譜」の最後に「昭和二十年十月初稿 二十二年十二月改訂」と記されていたことは先述した通りである。これに従えば、「巨艦送葬譜」は 1946 年の『創元』第一輯に掲載予

定であった、③の「初出テキスト」の後に改訂されたことになり、「初出テキスト」とは別稿となる。したがって、文語体の原稿としては、⑦の単行本『戦艦大和ノ最期』との中間に位置する原稿と考えるのが自然である。

結論から先に言えば、この事実に間違いはない。それは、③の「初出テキスト」及び⑦の『戦艦大和ノ最期』の記述と「巨艦送葬譜」の記述とを比較対照することで明らかとなる。端的に言えば、「巨艦送葬譜」は、③の「初出テキスト」に大幅な加筆がなされており、⑦の単行本では「巨艦送葬譜」の記述を基にして更に詳しくなっているからである。例えば、有名な白淵少尉の言葉を比較すると次のように変化している（下線部は追加・修正部分）。

③「初出テキスト」

「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ、負ケルコトガ最上ノ道ダ、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ハレルカ、今日覺メズシテイツ救ハレルカ、俺達ハソノ先導ダ」

「巨艦送葬譜」

「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ、ムシロ負ケルコトコソ最上ノ道ダ、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ハレルカ、今日覺メズシテイツ救ハレルカ、俺達ハソノ先導トナルノダ」

⑦『戦艦大和ノ最期』

「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ、負ケテ目覺メルコトガ最上ノ道ダ、日本ハ進歩トイフ事ヲ軽シジ過ギタ 私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワツテ、真ノ進歩ヲ忘レテキタ、敗レテ目覺メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ハレルカ、今日覺メズシテイツ救ハレルカ、俺達ハソノ先導ニナルノダ 日本ノ新生ニサキガケテ散ル マサニ本望ジャナイカ」(下線部は筆者)

また、伊藤整一長官の「最期」は次のように変化している。

③「初出テキスト」

「参謀長、長官ニ対シ敬礼サル……沈黙 長官、答禮、静カニ左右ヲ顧ミラル 幕僚ト握手、艦橋長官室へ（第二艦隊司令長官、伊藤整一中将御最期ナリ）」

「巨艦送葬譜」

「参謀長（少将）左手ヲ『コンパス』ニ支ヘツ、長官ニ対シ敬礼サル 永キ沈黙 長官、答禮、静カニ左右ヲ顧ミ、幕僚ト握手、一瞬微笑マレタリト思フヤ、長身ノ身ヲ翻シテ艦橋長官室へ（沈没マデ此ノ扉開カレズ マタ絶エ間ナキ破壊音ノ故カ、自決ノ銃聲ヲ聞カズ 第二艦隊司令長官伊藤整一中将、御最期ナリ）」

⑦『戦艦大和ノ最期』

「参謀長左手ヲ羅針盤ニ支ヘツツニジリヨツテ長官ニ舉手ノ禮 永キ沈黙 長官、禮ヲ返シ、降互ヒノ降ヲ射ル 粗笨無類ナル作戦ノ、最高責任者、及ビソノ補佐責任者 今ヤ豫期シタル無慙ノ敗北、遂ニ現實トナツテ目睫ニアリ アラユル諫言 アラユル焦慮 アラユル自嘲 アラユル憤懣 感無量ナルモ宜ナリ 長官、

拳手ノ答禮ノママ、静カニ左右ヲ顧ミ、生き残りノ士官一人一人ノ眸ヲ捉フ イザリ寄ル幕僚（参謀）數名ト、慇懃ノ握手、一瞬微笑マレタル如ク思ハレタルモ、ワレカネテヨリカカル光景ノウチニ勇者ノ微笑ヲ夢想シタルニ故ノ、錯覺ニ過ギザルヤモ知レズ長身ノ身ヲ翻シテ艦橋直下ノ長官室ヘ「ラッター」ヲ歩ミ去ル 開戦以來、一切ニ無縁、微動ダニセザリシ長官ノ、ワレラガ眼前ニ演ジタル行動ハ、スナハチ以上ニ盡ク ソノ沈没マデ、扉開カレズ マタ絶エ間ナキ破壊音ノ故カ、自決ノ銃聲ヲ聞カズ 或ヒハ携帯拳銃ヲ撫シツツ、身ヲ以テ艦ノ終焉ヲ味ハハレタルカ 第二艦隊司令長官伊藤整一中将、御最期ナリ」（下線部は筆者）

この他、吉田が海上に投げ出された後の浮遊中に頭部に裂傷を受けたこと、また、バッハの音楽を聞いたことなどは、③「初出テキスト」には記述されておらず、⑦『戦艦大和ノ最期』において初めて書き加えられたとされてきた。しかし、これらは「巨艦送葬譜」においてすでに記述されており、⑦『戦艦大和ノ最期』が初出でないことがわかる。つまり、「巨艦送葬譜」は、③「初出テキスト」から⑦『戦艦大和ノ最期』へと至る執筆過程での中間に位置する原稿であったことは明らかである。

## 5. おわりに

本稿で述べたように、『戦艦大和ノ最期』の成立までには、CCD（民間検閲局）の検閲による全面削除、また、名前を変えての口語体による掲載・出版など紆余曲折があった。これまで、多くの研究は千早による整理に基づき、8種類原稿についてその異同についても検討されてきた。新資料として発見された「巨艦送葬譜」は、9種類目の原稿であり、文語体による③「初出テキスト」から⑦『戦艦大和ノ最期』へと至る執筆過程を明らかにし、補強する資料と言える。

もちろん、なぜ吉田は「巨艦送葬譜」について言及しなかったのかという疑問も生じる。しかし、千早が吉田の原稿を8種類に整理して『大和の最期、それから—吉田満 戦後の航跡』を刊行したのが、2004（平成16）年であり、吉田の没後、25年の時を経ている。8種類の整理は、いわば研究上の便宜的なものであって、吉田にしてみれば、1974年の『戦艦大和ノ最期』の「決定稿保存版」までは一貫した執筆過程であり、その過程では夥しい加除修正が繰り返されていたと考えるのが自然である。したがって、吉田が、『創元』第一輯に掲載予定であった「初出テキスト」に特別なこだわりを持っていたとは考えられず、1949年に刊行した単行本⑥『軍艦大和』に掲載を予定していた文語体の「戦艦大和ノ最期」は、時系列的にも「初出テキスト」ではなく、「巨艦送葬譜」ないしは、これに近いものであったと考えるべきであろう。

ただし、「巨艦送葬譜」は他の原稿との大きな違いもある。書名である。しかし、この点についても先述したように、英語版での出版を意図したものであるとすると、ある程度は納得できる。第二次世界大戦の終結から2年程度の時間の中で、「戦艦大和」という書名が、どのような化学反応を起こすかを予測することは極めて難しかったはずである。ましてや、日

本では検閲によって原稿が全面削除され、掲載の目途が立たない状況の中で、敢えて「戦艦大和」という書名で出さないことは、十分にあり得る選択であったとしてもおかしくはない。

英語版での出版を想定したという前提に立てば、原稿の修正も説明がつく部分が多い。「巨艦送葬譜」が「初出テキスト」に大幅な追加を施したことは先に述べた通りであるが、その一方で、「巨艦送葬譜」では削除された記述もあるからである。例えば、次のような表現である。

- ・副長「神風大和ヲシテ眞ニ神風タラシメヨ」
- ・然ラバ必勝ノ信念ヲ如何ニスベキ未熟ノ自覺ト必勝ノ信念ト果シテ如何 貴重ノ試練ナルベシタダ突入ノ機ニ全能ヲ發揮セヨ
- ・恩賜ノ煙草、酒保ヲ支給サル
- ・悉ク百戦錬磨ノ精鋭ナリ
- ・雄偉ノ生気マサニ躍動シテ奮迅
- ・想ヒ見ルベシ、両艦兵一員ニ至ルマデノソノ闘魂ト鍊度トヲ

全体的に「巨艦送葬譜」の記述のトーンは、事実の描写に傾注されるが、こうした戦意の高揚をイメージさせる表現は削除されている傾向がある。そしてこの最も象徴的な部分が、文末である。③「初出テキスト」の文末は、「乗員三千余名ヲ数へ、還レルモノ僅カニ二百数十名 至烈ノ闘魂、至高ノ鍊度、天下ニ恥ヂザル最期ナリ」となっていたが、「巨艦送葬譜」では、「乗員三千余名ヲ数へ、還レルモノ僅カニ二百数十名 数千ノ骸ナホ堆積シテ沖繩ノ海底ニアリ」と記述された。ちなみに、⑦『戦艦大和ノ最期』では、「今ナオ埋没スル三千ノ骸 彼ヲ終焉ノ胸中果シテ如何」と変更されており、これらと比べると「巨艦送葬譜」では、死者への感情描写が捨象されているのがわかる。

繰り返すように、「巨艦送葬譜」は、③「初出テキスト」と⑦『戦艦大和ノ最期』の中間的・過渡的な原稿であると言える。ただしそれは、英語版の出版を意図した表現に配慮されたもので、感情描写に配慮しながら、事実描写に力点を置いたものとなっている。時期的に見ると、イギリスの日本文学研究者のS氏に送ったものか、少なくともそれに極めて近い原稿であると言える。

## 引用・参考文献

- 吉田満『軍艦大和』（銀座出版社、1949年）。
- 吉田満『戦艦大和ノ最期』（創元社、1952年）。
- 吉田満「占領下の『大和』」（『戦艦大和』収載、角川書店、1968年）。
- 吉田満『吉田満著作集』上・下巻（文藝春秋、1986年）。
- 江藤淳『落葉の掃き寄せ 一九四六年憲法—その拘束』（文藝春秋、1987年）。
- 千早耿一郎『大和の最期、それから—吉田満 戦後の航跡』（講談社、2004年）。
- 白洲正子『鶴川日記』（PHP研究所、2010年）。

山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』（岩波書店、2013年）。

島尾敏雄・吉田満『新編 特攻体験と戦後』（中央公論新社、2014年）。

**【付記】**

本稿での「巨艦送葬譜」の写真掲載については、吉田満氏の著作権者である吉田望氏より、「写真資料利用承諾書」による許諾を得た。記して御礼と感謝を申し上げたい。